

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2012年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻	
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部 教授	浅井 春夫
研究課題名	性教育実践による性意識の変化に関する研究 — 高校生への面接調査を通して —	
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名
	コミュニティ福祉学研究科コミュニティ福祉学専攻前期課程2年	田部 ころろ
研究期間	2012年度	
研究経費	10万 千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

子どもたちが性的なトラブルに巻き込まれないためには性教育が必要である。本研究では、性教育実践による知識の定着、また性意識の変化を詳細に探ることを目的として、高校生2年生10人を対象に半構造化面接を実施した。

その結果、同世代の性交に対してほとんどの生徒が肯定的であった。しかし、それは避妊や性感染症についての正しい知識があればしてもいいという考えであった。また、性交にはリスクが伴うことを学んだことで、高校生である今は性交をしないほうがいいという意見であった。正しい知識を学ぶことで、自分はどうか、どう行動すべきかということを考えることができたということは性教育を受けての大きな変化であるといえる。(300字)

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[性教育] [性意識] [変化]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 本研究の目的**

日本における性教育の評価研究では質問紙による量的調査がほとんどであり、直接生徒の声を聞いて調査を行った質的研究は筆者が検索した限り報告されていない。そこで本研究では、性教育実践によって正しい知識が定着しているかどうか、またそれによって意識がどのように変化したのかを詳細に探るために、1年間性教育を受けた高校生を対象として面接調査を行った。また、高校生への性教育のあり方について検討する。

2. 研究方法

2012年7月13日・17日・18日にS高等学校の高校2年生10名(男女各5名)を対象にして、1人60分程度の半構造化面接を実施した。S高等学校では性教育が必修総合科目として高校1年生の1年間実施されており、1学期は「性の機能」、2学期は「社会の中の性を考える」、3学期は「社会の中の性と生」をテーマとして授業が進められている。面接調査は、授業を受ける前の性に関する意識、考えについて回顧的に尋ねる形で行った。そして、授業を受け終わって4か月経過した現在の性に関する意識、考えについて聞き取った。質問内容は「同世代の性交」、「性感染症」、「避妊」についてである。

3. 結果と考察**1) 同世代の性交について**

初交の年齢についての考えでは、中学生では早いが高中生で経験するのは普通だと考える生徒が多かったが、中学生で経験することを普通だという意見もあった。日本性教育協会の実施した青少年の性行動調査(2012)では、中学生での性交経験率は男子で3.8%、女子で4.8%であり、実際には中学生では経験しているほうが珍しいといえるが、青少年の間には中学3年生になれば経験することも決して早くはないという意識があるようだ。中学生での性交を普通だと考える背景には、メディアの影響があると考えられる。漫画、ドラマでは中学生の恋愛を描いたものは数多くあるし、ネットや雑誌には、性交渉体験談などが掲載されている。これらのメディアの影響が子どもたちに「恋愛＝性交」というセックスを愛情表現のひとつとして捉える考えを強め、中学生でも性交することを普通だという認識にさせているのではないだろうか。

同世代の性交について、肯定的な生徒は9人であった。しかし、それは妊娠や性感染症を予防すればしてもよい、避妊や性感染症についての正しい知識があればしてもよい、お互いが同意のもとであればしてもよい、というような条件つきでの容認であった。また、高校で性教育を受ける以前に同世代の性交について考えたことがなかったとしている者は7人であり、その理由としては、性について興味がなかったため考えもしなかった、詳しい知識がなかったため真剣に考えたことがなかったということであった。

今回の調査対象者は同世代の性交について肯定しているものが多かったが、自分はまだ経験したくないという語りもきけた。その理由としては、性交には妊娠や性感染症のリスクが伴うから怖くてしたくない、子どもができてしまっても育てられないからしたくないという意見であった。また、援助交際のような金銭の伴う性交については否定的であるものが多く、自分の意思でしていたとしても、性をお金で売ることに抵抗を感じるようであった。調査対象者は、中高生での性交が良い悪いという単純な判断ではなく、なぜしないほうがいいのかを考えることができていたといえるだろう。

2) 性感染症について

性感染症について聞くと、すぐに連想される単語は「エイズ」であり、血の病気、怖い病気、死の病というようなイメージをもっていたものが多かった。特にこれは漫画やテレビなどを見てそう思ったとするものが多かった。中学校の保健の授業でエイズや性感染症について習ったと答えていた生徒もいたが、性交での感染を習っていない、性交での感染を習ったが予防としてコンドームは習っていないなど、学んでいる内容にばらつきがあり、かつ不十分であることがうかがえた。特に、高校で学ぶまで性交で感染することを知らなかったとするものは7人であり、これは問題であると考えられる。厚生労働省の調査(2011)では、15歳以上では15歳未満と比べて性感染症罹患率が急増することが明らかとなっている。そのことを考えると、中学生までに知っておくべき知識である。中学校でどのような性教育を受けたか確かめることはできないが、ほとんど知識を得ていない、あるいは知識が定着していないことがいえるだろう。

また、性交によって感染することを知り、もしかしたら身近に感染している人がいるかもしれないと思ったという語りも聞けた。性教育で感染経路を学び、性感染症が奇異な病気ではなく誰にでもなる可能性があるという認識に変化していたと考えられる。また、性病になった男性は生きた精子が出ないと中学生のときに習ったとする生徒もおり、これは今までにネットなどから得た性情報によって知識がゆがめられたものと考えられる。学校でどんなにしっかり学んでも一度では忘れてしまうため、繰り返し学ぶことが必要であると考えられる。

研究成果の概要 つづき**3) 避妊について**

コンドームを使用する以外の避妊法については、ピルを挙げるものが多かったが、ピルという単語が出てこないものや薬局で手に入ると答えるものもあり、身近でピルを見ることがないためかコンドームよりも知識が定着していないことがうかがえた。また、中学の時にコンドームを使わなくても避妊できる方法として友人から聞いたことがあるという男子もいた。売春をしている女子高生がピルを飲んでいる場面を漫画で見たことがあるという女子もいた。一度飲むだけで性交しても妊娠しないといった手軽に用いることができる避妊法として認識しているようだった。ピルは女性が主体的に使用できる避妊薬であるが、どこに行けば手に入るのか、費用や正しい用法なども女子だけでなく、男子も知識として定着させる必要があるだろう。避妊をしないとどのようなことが起きるのかを学んだことで、妊娠を望んでいない場合に避妊をしないのは無責任なことであるという語りが女子からも男子からも聞いた。

女子生徒の中で、性交には愛や好きな気持ちが必要としていたが、避妊をしない性交は愛がないのと一緒にだと語りが聞けた。そもそも性交には妊娠のリスクが伴うのに、性交を求めてくるパートナーは自分のことを考えてくれない証拠だと語っており、「性交を求めてくること＝愛情表現」ではないということを知っていたと考えられる。男子生徒の中では、今の自分では家庭をもつことができないため、彼女が妊娠しても中絶をさせることになり、その結果相手を傷つけてしまうという語りがあった。現在の自分と性交のリスクについて考えることができていたと考えられる。ただ避妊をすればいいというのではなく、避妊がなぜ重要なのかを学ぶことで、そのうえで、今の自分たちは性交をするべきではないという考えに至っていたといえるだろう。

性意識が性行動に影響を与えることがこれまでの研究で示されており、性教育によって正しい知識を学び、形成された性意識は賢明な性行動につながると考えられる。避妊が 100% でないことを学び、今の自分の状況と将来の自分を想像することで、今は性交は控えたほうが良いという考えになっていたことは性教育の大きな効果といえるだろう。

4) デート DV について

今回の調査ではデート DV の被害や加害経験についてはこちらから尋ねなかったのだが、インタビューの中で、2 人の女子からはデート DV と思われる実体験の語りが出た。以前付き合っていた恋人から、暴言を吐かれたり、付きまとわれたり、mixi 等の SNS にしつこくメッセージが送られてきたという内容であった。一人は友人がデート DV にあっていることを話していたが、自分はされたことはないと言っていた。もう一人は彼氏が付きまとってきた場合、周囲の友人が助けてくれると話していたが、デート DV にあっているという自覚はないようだった。このことから、デート DV に学ぶことで周囲のデート DV については敏感になれるのかもしれないが、自分が当事者であることは感じにくいと考えられる。しかし、生徒それぞれがデート DV についての知識を持つことで、被害にあっている友人を心配したり、加害をしている友人に注意をすることができていたことは性教育の効果であろう。

知らず知らずのうちにデート DV を行っていたり、されていたりすることもあると強調し、現在恋人がいる生徒には、自分の行動やパートナーとの関係性について振り替えて考えさせることも必要である。学んだとしても被害者あるいは加害者になってしまうかもしれないが、デート DV が深刻化せずに済むという点で、生徒がデート DV を学ぶことには大きな意義があると考えられる。

5) 高校生への性教育プログラムの試案

まず性的自己決定能力の形成において、特にノーセックス、避妊のテーマが重要であると考えられる。高校生では性交経験率が高まることから、性行動の主体者として必要な性的自己決定能力を身につけることが重要課題である。第一の選択肢は「ノーセックス」であることは言うまでもないが、実際には遅かれ早かれセックスを伴う生活を送ることになる。したがって、予期しない妊娠をしないためには、避妊は性生活のミニマム・エッセンスである。具体的な場面を想定しながら、主体的に避妊を実行できる行動力を培っていくことが求められる。次に、性感染症・エイズの理解とその予防のテーマが重要となる。性感染症についての正しい知識とその予防について学び、自分にも関係のあることと認識することが重要となる。メディア・リテラシーについては、特に携帯・スマートフォンの普及を考えるとネット情報に対する判断能力のテーマが重要であると考えられる。ネットへの書き込みは、どこのだれが書いたのかわからないことに留意し、最もらしく書かれていたとしても、まずは疑ってみる必要があることを伝える必要がある。そして、「性をめぐる人間関係の学習」の課題では、レイプ・ストーカー・セクハラ・デート DV などの性暴力とその対応方法のテーマが重要となる。特に高校生の恋愛におけるデート DV について学んでおくことが重要であり、性暴力については、相手の心情と性的人権を考える力をはぐくむ実践が必要であるだろう。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

田部こころ 「性教育実践における性意識の変化に関する研究－高校生への面接調査を通して－」 立教大学コミュニティ福祉学研究科紀要 第11号, 2013年, pp69-78